

「新しいぶどう酒、新しい皮袋」

マルコの福音書 2:18~22

はじめに

イエシュアは、取税人であったレビという人に目を留め、「私について来なさい」と声をかけられました。レビはこれに聞き従います。そして彼はイエシュアとその弟子たちを自宅に招き、さらにイエシュアに従った大勢の取税人たちや罪人たちも招いて、ともに食卓を囲みました。しかしそこで彼らが大いに飲み食いしていたその日は、どうやらユダヤ人の「断食」の日であったようです。彼らの飲み食いの現場を目撃した人々がやって来て、「なぜ断食しないのか」とイエシュアに問いただす場面、それが今日の箇所です。

1. ユダヤ人の「断食」

【新改訳 2017】

マルコの福音書

2:18 さて、ヨハネの弟子たちとパリサイ人たちは、断食をしていた。そこで、人々はイエスのもとに来て言った。「ヨハネの弟子たちやパリサイ人の弟子たちは断食をしているのに、なぜあなたの弟子たちは断食をしないのですか。」

イエシュアと弟子たちがレビの家で食事をともにしていたその日、「ヨハネの弟子たちとパリサイ人たちは、断食をしていた。」とあります。ここに全く対照的な、相反する内容の二つの絵が存在します。一つはイエシュアを中心とした楽しい食卓、イエシュアに招かれた、イエシュアに従う人々が交わる家、そしてもう一つはそのイエシュアに反目し、家の外で断食している人々の姿です。この二つの絵は一体何を指し示しているのでしょうか。一つ考えられることは、イエシュアがおられた食卓の家はイエシュアを信じる教会、クリスチャンを表し、そして断食している人々「ヨハネの弟子たちやパリサイ人の弟子たち」とはイエシュアを神の御子であるメシア（キリスト）として受け入れなかったユダヤ人たちを指し示しているということです。ちなみに「ヨハネの弟子たち」とはバプテスマのヨハネの弟子たちのことですが、彼らの師であるヨハネに「私よりも力のある方が私の後に来られます。私には、かがんでその方の履き物のひもを解く資格もありません。（マルコ 1:7）」と言わしめたイエシュアが現れた後も、彼らは自分たちの立場にとどまり続け、イエシュアについて行かなかった者たちであると考えられます。彼らとパリサイ人たちは、立場は違ってもイエシュアに従って行かなかったという態度においては共通している同じユダヤ人であると言えます。

ではこの二つの絵が教会とイスラエル、ユダヤ人を表しているとして、ここに記されている「断食」とは一体何を意味しているのでしょうか。一般的には人がその願望を叶えるため、また誓願を果たすための難業苦行として飲食を断つ行為を指しますが、ヘブル語ではこれをツーム(צום)と言い、士師記 20:26 にその最初の言及が記されています。

【新改訳 2017】

士師記

20:24 そこで、イスラエルの子らは次の日、ベニヤミン族に向かって行ったが、

20:25 ベニヤミンも次の日、ギブアから出て来て彼らを迎え撃ち、再びイスラエルの子らのうち一万八千人をその場で殺した。これらの者はみな、剣を使う者であった。

20:26 イスラエルの子らはみな、こぞってベテルに上って行って泣き、そこで【主】の前に座り、その日は夕方まで断食をし、全焼のささげ物と交わりのいけにえを【主】の前に献げた。

この記述は、12の部族からなるイスラエルの民のうちの一つであるベニヤミン族が、他の11の部族を相手に戦うという出来事についてのものです。この争いの発端はベニヤミン族にあります。彼らの中で「イスラエルの子らがエジプトの地から上って来た日から今日まで、このようなことは起こったこともなければ、見たこともない。(士師記 19:30)」というほどの口に出すのもおぞましい犯罪が行われたためです。その罪を裁くべく「イスラエルの子ら」はこのベニヤミン族に対し、40万人という大軍を差し向けます。ところがこの大軍が、3万人足らずのベニヤミン族に二度も破れてしまいます。正義は「イスラエルの子ら」にあるはずでした。兵力も圧倒的に有利でしたし、何より神が彼らに味方しておられました。にもかかわらず二度も破れたのです。正義が負ける、勝てるはずの戦に勝てない、そんな不条理に対する嘆き、怒りの中に聖書で最初の「断食する」ツームが使われています。ですからツームとは本来、**神にある者、正義が負ける、正しい者が殺される、というような不条理に対する嘆き**を指し示す言葉であると考えられ、「ヨハネの弟子たちやパリサイ人の弟子たち」に表されたイスラエルの民、ユダヤ人がまさにそのような存在であると考えられます。なぜなら彼らはアブラハム、イサク、ヤコブの子孫として神に選ばれた民であることが聖書にはっきりと記されているからです。しかしその歴史において、彼らの国土は異邦人に奪われ、民は世界中に離散し、更にその行く先々で虐げられ、迫害され続けて今日に至ります。神がお選びになった民であるはずのイスラエル、ユダヤ人たちがなぜこのような目にあうのか、この不条理に対する彼らの嘆きが「断食する」と訳されたツームの本来の意味の中に表されていると考えられます。そして今日も「嘆きの壁」と呼ばれる、エルサレムの破壊された神殿の壁の前で祈るユダヤ人たちの姿もまたこれを象徴していると言えます。このように、イエシュアの招く食卓の家に入れず、「ヨハネの弟子たちとパリサイ人たちは、断食をしていた。」という様子の中に、今日もなお続くイスラエルの民、ユダヤ人たちの嘆きが表されていると考えられます。しかしこの不条理に対する嘆きはユダヤ人たちだけが味わうものではないことが次の箇所に表示されています。

2. 教会の「断食」

【新改訳 2017】

マルコの福音書

2:19 イエスは彼らに言われた。「花婿に付き添う友人たちは、花婿と一緒にいる間、断食できるでしょうか。花婿と一緒にいる間は、断食できないのです。」

2:20 しかし、彼らから花婿が取り去られる日が来ます。その日には断食をします。

イエシュアはご自分を「花婿」、そして家とともに食卓に着いていた人々を「花婿に付き添う友人たち」にたとえられました。これが私たち教会、クリスチャンを指し示すことは先ほど述べましたが、「花婿が取り去られる日」にはユダヤ人同様、教会も「断食する」ことが示されていると考えられます。まずこの「花婿が取り去られる日」とは一体いつのことでしょうか。やはりこれはイエシュアが十字架にかかれ、そして死なれることであり、またその死から復活された後に、再び帰って来られることを約束しながらも、地上を去り、天の御父のみもとに上って行かれることをも指し示していると考えられます。では「花婿に付き添う友人たち」にたとえられた、教会がする断食、ツームとは一体どのようなものでしょうか。イエシュアが天に上られた後、イエシュアの弟子たちを中心として始まった教会は聖霊の助けを得て成長していきます。しかし四福音書以降の新約聖書、特に使徒の働きなどにはユダヤ人の指導者たちから、また異教の民から、そして国家権力（ローマ）からの教会、クリスチャンに対する迫害の様子が数多く記されています。私たちの日本においてもおよそ 20 万人のクリスチャンが迫害によって殺されたと伝えられています。イエシュア、イエス・キリストはまことの神の御子であるはずなのに、この御方を信じる者たちになぜこのような不条理と思えることが起こるのか、今日の私たちは命を狙われるような迫害は受けていませんが、街には多くの人々がいるのに、人々はなぜ神を、イエシュアを信じないのか、教会に集まって来ないのか、なぜこんなにも教会は弱く小さいのかという不条理を感じる中に置かれています。「断食する」と訳されたツームには本来、神にある者が負ける、正しい者が殺される、という不条理に対する嘆きが指し示されていると述べました。ですからイエシュアの十字架の死以降、今日に至るまで私たち教会もまた「断食する」ツームの状態にあることが示されていると考えられます。

このように、ユダヤ人も、そして私たち教会もともに「断食する」と訳されたツームの本来の意味が指し示している、神の選びの中にありながらも、今日不条理の嘆きの中に置かれていることがこの箇所には表されていると考えられます。それはどちらもイエシュアによってしかこの嘆きの状態から脱する術はなく、ともにイエシュアを求め、待ち望まねばならないことを示すためであると考えられます。

3. 継ぎを当てる

【新改訳 2017】

マルコの福音書

2:21 だれも、真新しい布切れで古い衣に継ぎを当てたりはしません。そんなことをすれば、継ぎ切れが衣を、新しいものが古いものを引き裂き、破れはもっとひどくなります。

イエシュアは更にたとえを用いて語られます。「真新しい布切れで古い衣に継ぎを当てたりはしません」とはどういうことでしょうか。先ほどの「断食する」という状態が、ここでは「古い衣」という表現に置き換えられていると考えられます。なぜなら先ほど述べたように「断食する」と訳されたヘブル語ツームは本来、戦に敗れること、つまり痛めつけられる、傷つくことを指し示すと考えられるからです。ですからこの「古い衣」とは痛んだ、傷ついた衣であると考えられ、神の選びの中にありながら、不条理な扱い、迫害を受ける嘆きを持ったユダヤ人、そして教会を指し示すと考えられます。しかしイ

イエシュアはそんな彼らに「継ぎを当て」るようなことはしないと語られます。なぜでしょうか。この「継ぎを当て」ると訳されたヘブル語はターファル(תָּפַל)と言い、創世記 3:7 でアダムとエバが自分たちの腰の覆いを作ったことにその最初の言及があります。

【新改訳 2017】

創世記

3:7 こうして、ふたりの目は開かれ、自分たちが裸であることを知った。そこで彼らは、いちじくの葉をつづり合わせて、自分たちのために腰の覆いを作った。

神が食べてはならないと命じられた善悪の知識の木の実を食べてしまったアダムとエバは、「いちじくの葉をつづり合わせて」腰の覆いを作ったことが記されており、ここに聖書で最初のターファルがあります。「腰の覆い」とは帯、ベルトのことで、イスラエルでは帯を締めることは外出、家を出て外に行くこと、または旅に出ることを意味します。つまりアダムとエバはエデンの園から、神のみそばから出て行こうとしたことが表されていると考えられます。ですから「継ぎを当てる」と訳されたターファルとは本来、神から離れる、エデンすなわち神の家、国から出て行くということが指し示されていると考えられます。神はイスラエルの民、ユダヤ人を、そして教会を選んでおられ、ご自分の民、神の国の民にしようとしておられるのです。永遠にご自分のそばに置こうとしておられるのです。ですからイエシュアは「継ぎを当てたりはしません」と、このターファルを否定して言われたのだと考えられます。ちなみに「真新しい」と訳されたヘブル語ハーダーシュ(חָדָשׁ)には本来、イスラエルの民の上に建てられた「新しい王」という意味合いがあるのです。

【新改訳 2017】

出エジプト記

1:8 やがて、ヨセフのことを知らない新しい王がエジプトに起こった。

1:9 彼は民に言った。「見よ。イスラエルの民はわれわれよりも多く、また強い。

1:10 さあ、彼らを賢く取り扱おう。彼らが多くなり、いざ戦いというときに敵側についてわれわれと戦い、この地から出て行くことがないように。」

この記述はエジプトの王ファラオについてのものですが、ここに「新しい」と訳されたハーダーシュの最初の言及があります。この「新しい王」はイスラエルの民をエジプトから「この地から出て行くことがないように。」した王であることが記されています。つまりハーダーシュには本来、イスラエルの民を自分の国にとどまらせる、みそばに置く王という意味合いがあると考えられ、先ほどのターファルを否定的に用いて語られた理由ともつながります。「新しい王」であるイエシュアは、神の民であるイスラエル、ユダヤ人たちをご自分の国である神の国に、永遠に住まわせることがこの「真新しい布切れで古い衣に継ぎを当てたりはしません」というたとえの中に神の御心、御計画として表されていると考えられます。

4. 新しいぶどう酒

【新改訳 2017】

マルコの福音書

2:22 まただれも、新しいぶどう酒を古い皮袋に入れたりはしません。そんなことをすれば、ぶどう酒は皮袋を裂き、ぶどう酒も皮袋もだめになります。新しいぶどう酒は新しい皮袋に入れるものです。」

イエシュアのたとえ話はさらに続きます。今度は「新しいぶどう酒を古い皮袋に入れたりはしません」ということについてです。まず「新しいぶどう酒」について。「新しい」は先ほど述べたハーダーシユで、イスラエルの王イエシュアを指し示す言葉です。そして「ぶどう酒」はヤイン(יַיִן)と言い、創世記 9:21 にその最初の言及があります。

【新改訳 2017】

創世記

9:20 さて、ノアは農夫となり、ぶどう畑を作り始めた。

9:21 彼は**ぶどう酒**を飲んで酔い、自分の天幕の中で裸になった。

これはノアが箱舟によって滅びを免れ、その後再び地に住むようになった場面です。「**ぶどう酒**を飲んで酔い」という箇所には聖書で最初のヤインがあります。そして彼は「天幕の中で裸になった」ともありません。先ほどアダムとエバが腰の覆いを作ったことについて、それは帯を締めて出て行くことを意味すると述べましたが、それとは逆にノアは「**ぶどう酒**」によって裸になり、天幕の中にとどまったことが記されています。ですから「**ぶどう酒**」と訳されたヤインには本来、**天幕の中に住まう、とどまる**という意味合いが表されていると考えられます。そしてその天幕とは「**新しい王**」の天幕、すなわちイエシュアの天幕である神の国です。このように「**新しいぶどう酒**」とはイエシュアを王とする神の国にとどまることが指し示されていると考えられます。

そしてこの「新しいぶどう酒」は、「古い皮袋に入れたりはしません」とあります。「皮袋」のことをヘブル語でノド(תָּבִיט)と言い、ヨシュア記 9:4 にその最初の言及があります。

【新改訳 2017】

ヨシュア記

9:3 ギブオンの住民たちは、ヨシュアがエリコとアイに対して行ったことを聞くと、

9:4 彼らもまた策略をめぐらし、変装をした。古びた袋と、**古びて破れて継ぎ当てをしたぶどう酒の皮袋**をろばに負わせ、

9:5 繕った古い履き物を足にはき、古びた上着を身に着けた。彼らの食糧のパンはみな乾いて、ぼろぼろになっていた。

9:6 彼らはギルガルの陣営のヨシュアのところに来て、彼とイスラエルの人々に言った。「私たちは遠い国から参りました。ですから今、私たちと盟約を結んでください。」

9:15 ヨシユアは彼らと和を講じ、彼らを生かしておく盟約を結んだ。会衆の上に立つ族長たちは彼らに誓った。

これはイスラエルの民と「和を講じ、…盟約を結んだ」ギブオン人という異邦人たちについての記述です。彼らはイスラエルの民に滅ぼされないために、見知らぬ遠い国から来た民を装い「古びて破れて継ぎ当てをしたぶどう酒の皮袋」を持ってイスラエルに近づきました。ここに聖書で最初のノドがあります。ですから「皮袋」ノドには本来、イスラエルに結ばれた、イスラエルの神を自分の神とする異邦人というような意味が指し示されていると考えられ、イスラエルの民、ユダヤ人と異邦人が共存することを指し示すために、イエシュアはこのたとえを用いられたのだと考えられます。

5. 新しい皮袋

しかしたとえイスラエルとイスラエルに結ばれる異邦人があっても「新しいぶどう酒を古い皮袋に入れたりはいしません」とあるように、「古い皮袋」のままでは「新しいぶどう酒」であるイエシュアを王とする神の国には入れません。「そんなことをすれば、ぶどう酒は皮袋を裂き、ぶどう酒も皮袋もだめになります」とあるように、民だけでなく神の国そのものがだめになってしまうと示されています。この解決策はただ一つ、「新しいぶどう酒は新しい皮袋に入れる」ことです。「新しい皮袋」とは、「新しい」と訳された「新しい王」であるイエシュアを王とするイスラエルの民、そしてそれに結ばれる異邦人すなわち教会、この三つの存在があって、正確にはイエシュアによってイスラエルと教会が結ばれ、一つとされて神の国は完成するのです。そのご計画がこの「新しいぶどう酒は新しい皮袋に入れる」というたとえの中に表されていると考えられます。ちなみに新しいぶどう酒を「入れる」と訳されているヘブル語ナタン(נָתַן)は創世記 1:17 にその最初の言及があり、地上を治める、統治するために置かれるという意味合いがあります。

【新改訳 2017】

創世記

1:16 神は二つの大きな光る物を造られた。大きいほうの光る物には昼を治めさせ、小さいほうの光る物には夜を治めさせた。また星も造られた。

1:17 神はそれらを天の大空に置き、地の上を照らせ、

1:18 また昼と夜を治めさせ、光と闇を分けるようにされた。神はそれを良しと見られた。

これは天地創造の御業の第四日、太陽と月を創造された出来事と解釈されている箇所です。神は地上を「治めさせ」るために「神は…置き」という箇所に聖書で最初のナタンがあります。このようにぶどう酒を「入れる」と訳されたナタンには本来、地上を治めさせるために神によって置かれることを指し示した言葉であると考えられ、イエシュアを王とするイスラエルと、そこに結ばれた異邦人の教会によって治められる国、それが神の国についての神のご計画であることが「新しいぶどう酒は新しい皮袋に入れる」というたとえの中に表されていると考えられます。

今日の箇所は、「断食」に象徴された神の選びの民が持つ嘆きが、「花婿」であり「新しい」王であるイエシュアを求めさせ、やがてそのイエシュアによってイスラエルの民、ユダヤ人とそれに結ばれる異邦人の教会に「新しいぶどう酒」にたとえられた神の国が与えられるという神のご計画の完成が、たとえとして表された箇所であると述べました。ですから今日もイエシュアを求めましょう。そしてこの御方によって成し遂げられる神のご計画の完成を求めましょう。神の国、御国が来ますようにと求めて祈りましょう。